
ヨビネの声

YENA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヨビネの声

【Nコード】

N4467S

【作者名】

YENA

【あらすじ】

それは2006年の7月もまもなく終わろうとしていた頃のこと。召喚師と呼ばれる魔法使いであるアヤカは仕事でイギリスへ来ていた。

魔物との戦いを生業とする召喚師だが、アヤカは事前情報より格段に強い古い神と戦うことになってしまう。

さらには異世界へ飛ばされ、しかもそこは有名なお話である『ハリ・ポッター』と酷似した世界だった。

とにかくにも元の世界へ返るため、戦ったり学園生活を送るアヤ

力の明日はどっちだ!?

プロローグ 前編

それは昔々の話。

1000年前の平安時代、女だてらに陰陽師としてあやかし退治をしていた女がいた。名を加茂呼音という。

しかし彼女に陰陽師として重要な数々の才が欠けていた。唯一彼女が誇れるのは式神使いの能力のみ。そんな彼女の元に黒髪紅瞳の天狗が現れる。天狗は彼女と手を取り、新しく秘術を生み出し数々の困難を乗り越えた。やがて二人は夫婦となって、その秘術を自らの血を引く者に受け継がせたという。

そして、時は2006年7月28日。

イギリスに現存する遺跡の近くにいくつものトレーラーが停車していた。そのひとつの裏側で美しい女が一人、柳眉を寄せて苛立ちもあらわに電話をしている。

電話相手は彼女の祖父で、女にとっては何度も聞いて飽き飽きしている言葉を彼女に聞かせている。女の耳にその言葉が入るたびにうんざりした表情が一句ごとに深まるが、当然顔も見えない祖父はそれに気づかない。

話の種は、女の職業の存在意義について。

『……その秘術が召喚術であり、呼音の血を引き召喚術を受け継いだのが我々召喚師^{エウオーカー}なのだぞ、彩夏』

「あーあーわかってるっておじいちゃん、その話は耳にタコよ！」

祖父の言葉をさえぎって、女……アヤ力は簡潔に自らを含む者たちの職業である“召喚師^{エウオーカー}”がどんなものなのかを口に出す。

まず召喚師は、現代において表向きは存在が否定されている魔法使いの一種であること。さまざまな形や力を持つ物や者を、まるで召喚しているように見えるために召喚師と呼ばれること。召喚師が使う術が召喚術と呼ばれること。召喚師は現代において、依頼を受けて秘密裏に魔法的なトラブル——魔物の駆除や封印、魔法的な物品の処理など——を行う者であること。召喚術は人のためにあるもので、人間を傷つけるために使ってはならないこと。

アヤ力はさらに詳細を続ける。召喚師の国際組織は総勢2万人と言う規模であり、そのうち召喚術が使える人間は1000人に満たないこと。召喚師組織のトップは本家深山家頭首である自らの祖父であること。召喚師の部署は大まかに分けて三つ存在し、ひとつは実働部隊であり、召喚術の使える“召喚師”、ひとつは召喚師をサポートする“師補”、最後に外部との窓口であり、財政を回す“営業”だ。時代遅れなことに——と言っても有限会社である上魔術的な要素のためしかたがないのだが——召喚師組織のトップは、代々深山家の家長が継ぐことになっている。

さらに実働部隊の召喚師には位階があり、下から準召喚師、正召喚師、上召喚師、正統召喚師^{エウオーク・スター}となる。準召喚師は研修期間中の見習いであり、期間が明ければ正召喚師へと上がることとなる。正召喚師は一般的な召喚師であり、通常の任務は彼らが当たる。上召喚師は召喚師の指揮官であり、中規模以上の仕事で指揮を執ることにな

る。正統召喚師は13人しかいない、召喚師の中でも最も強いと認められた者にしかねない役職だった。ちなみに正統召喚師は上召喚師の資格もかねている。

なお、アヤカの祖父は正統召喚師の筆頭である。かく言うアヤカも弱冠16にして――20台半ばの外見からは想像がつかないだろうが――“暴君”の名を持つ正統召喚師であり、多くの召喚師の上に立つ人間だ。

備考としてはアヤカは最近上召喚師から正統召喚師に上がったばかりであり、正統召喚師になっての初仕事を目前にしていた。具体的には開始の40分ほど前だった。

「任務の直前まで歴史の勉強はいりません！　というか、私が昇格試験のペーパーで200点満点中何点だったと思ってるの？」

『……196点』

「でしょ？　実技は？」

『減点式で総合点数500満点中487点』

「合格点はペーパー120、実技300、総合500。

ペーパーでは13代目頭首の名前を書き間違えたし、実技じゃ狙撃で6点マイナス……ほかにこまごましたミスはあるけど、ほぼ完璧だったでしょ？

これで不安だなんて言われちゃたまったもんじゃないわよ！」

『しかしだなアヤカ』

「ところでおじいちゃん、仕事はどうしたの？　私とだべってる時

間なんてあるのかしら、召喚師代表取締役にして本家深山頭首の深山雷蔵殿？

それとも頭首閣下を含めて13名しかない正統召喚師の私に『不安だから気をつける』なんて言う気？　ざっけんじゃないわよバーロー！

こっちは！　仕事で！　イギリスに！　来てるの！　高校が夏休みになっていきなり仕事を入れたのおじいちゃんでしょ！？

友達と遊ぶ約束をしたのとか、予約してたゲームをしたかったのとか、言いたいことはたくさんあるわよ、そりゃあもう！

でもね？　高校1年生でも半分社会人ですからア？　正式に社員として働いてますからア？　いくら身内といえど業務命令ですからアア？

それで高給とつても、未成年だから貯金通帳行きで月々100分の1以下の5000円しか自由に使えないとかアア！？　夏休みが10日つぶれても苦情は申しませんとも、ええ！

『しっかり苦情を言っているではないか……』

「上司への苦情と身内への愚痴は別よ。戦国BASARA2楽しみにしてたのに……あさって日本に帰国したら覚えという……！！」

『ばあさんや、飯はまだかのう』

「ごまかす気？　おととい食べたでしょ」

『毎日食わせんか！？』

「うつさい妖怪ジジイ！　帰ったら退治してやるうつうつ！」

かわいらしい恨みがたつぷりこもった声を電話の相手に暴投するアヤカ。美女の叫びを聞いた周囲のスタッフがぎょっとして立ち止まるが、発言者を見て、さらに電話相手を彼女の言葉から知って、何だいつものことかとすぐさま作業に戻っていった。

場所こそ違えど、いかめしい顔をしてその実なかなかファンキーな祖父と、年齢に似合わない大人びた顔立ちをした美女高校生——間違っても美少女という外見ではない——の口喧嘩はよくあることなのである。

「忙しいからもう切るわね！ 次にかけてくるときは仕事が終わってからにしてちょうだい！」

ここで『もう掛けてくるな』と言わないあたり、アヤカも祖父のことを慕っているのである。

「……お電話はお済みですか？ “暴君”」

タイラント

電話が終わったのを見計らって、先ほどからアヤカのそばで直立不動にしていた男がそう尋ねた。

「ええ、今無理やり切ったところ。ったく、心配性にもほどがあるわ」

まったく、と不機嫌さを隠そうともせずアヤカは天幕へ向かう。

簡易組み立てのテーブルの上に広げられた地図と、その上にいくつも乗った、各班の配置を示すマグネットがアヤカを迎え、その周辺に何人も集まった師補の大人たちを見回して、アヤカは仕事用には思考を切り替えて口を開く。

「配置の準備はできましたか？」

「はい。結界担当一班から六班まですぐにでも動けます」

「狙撃班は？」

「三班ともいつでもどうぞ」

「よろしい。当初は結界班がこの六ヶ所で罫目の陣を形成するはずでしたが、地形の関係で少しずつ違います。

二班が3時方向に30cm、三班が1時方向に50cm、六班が5時方向に10cm。

狙撃班の配置に変更はありません。予定通り私の術で二重空間に穴を開けるので、各自それぞれ規定どおり動くように」

「了解、タイラント“暴君”」

「では、健闘を祈ります」

その一言でアヤカは話を締めた。

二重空間。“マヨヒガ”を代表する妖怪の隠れ里や、ここイギリスでは妖精が住まう“ティル・ナ・ノーグ”などがそうだと言われている。

現実空間には存在しないが、位相をずらして形成した異空間をそう呼称し、XYZのどの軸においても重なっているが、三次元では観測できない未知の軸においてずれた場所に存在していると言われる。魔法的な理論上では作成可能らしいが、実際に作るとなると莫大なエネルギーが必要になるうえ、ちょっとした空間のゆがみで中の生物が即死するなどということが起こりうるため、現実的ではない技術だ。

その二重空間の内側に多数の小型魔物が生息していると言う観測結果を得たため、早期に駆除を行おうと召喚師が引っ張り出されてきたのだった。そしてその観測者が先ほどからアヤカのそばにいる男だ。

「では退避許可を……」

「許可できません。二重空間の中を観測したのはあなた一人。あなたの報告のみが今回の作戦行動の基準となっています。あなたの全面的な協力が必要です」

「わ、私が持つ情報はすでにすべて報告しています。その必要はないのでは？」

「こういった状況においての規範は召喚師職務規定第26条12項に記載されています。

よって、許可できません。この本部にて引き続き情報提供と観測協力をしてください。これは命令です」

「ぐっ……了解しました」

本当に大丈夫なんだろうかこいつ、と思いつつ、アヤカは無表情のままその場を去った。こういった情報源の少ない仕事の場合、情報を持ってきた師補が中核となつて情報に関する補助をするのは定石だ。それを知らないと言うことは、よほどの新入りなのだろうか？
いや、今は時間がない。アヤカは頭を振って召喚術を使う。

「大空を舞うものよ、風を導け」

呼び出すのは色とりどりの風切り羽をもつ純白の巨鳥だ。召喚術とは、魂に刻んだ理想図を元に、呪文で世界へと接続し、魔力で仮の肉体を与える術だ。召喚術によつて現れたものすべてをどのような形状であつても召喚獣と呼び、術者によつて扱う召喚獣がそれぞれ違う。

召喚師ならば通常は最低でも十数体、多ければ三十体程度の召喚術を持つのが常で、その総数と同時に維持できる数、召喚獣をコントロールする技巧こそが召喚師の強さと言えた。戦術が拙ければ覆される可能性の大きい強さだが、召喚師の“最強”の代名詞である“正統召喚師”の一人であるアヤカが、その点に抜かりがあるはずはない。

アヤカは召喚獣にまたがり、空高く飛翔する。上空300メートルほどにきたところで上昇を停止して眼下の光景を見渡した。

風は、ない。この召喚獣、白鳳ケイツ・ハリーの設計理念は『人に乗せ飛翔すること』だ。召喚獣の周囲には魔力の壁が張り巡らされ、上空の気圧や温度の変化、慣性から搭乗者を守ってくれる。

「やて」

アヤカは召喚師御用達の、メガネに擬態した特殊な器具をかける。レンズを覗くと魔力が発光して視認できるようになるメガネだ。前調査どおり、地面のいくつかのポイントに魔力が停滞している部分がある。その場所を結界で押さえて、中心部の魔力が湧き出ている部分に一発ブチかます。すると、二重空間の入り口がこじ開けられると言うわけだ。

耳にかけたトランシーバーのヘッドフォンとマイクをオンにして、アヤカは指示を出す。

「こちら“^{タイラント}暴君”です、作戦行動開始まで4分を切りました。総員配置に着きなさい」

『結界一斑配置につきました』

『結界三班、問題ありません』

『同じく二班、大丈夫です』

『狙撃一斑、準備完了です』

『結界五班、OKです』

『狙撃三班、問題なし』

『結界六班、次の指示をどうぞ』

『結界四班、いつでもいけます』

『狙撃二班、配置完了』

「……本部、応答を」

『……た、待機完了です』

「では作戦開始まであと1分24秒……30秒を切ったらカウントを始めてください」

アヤカは二重空間の入り口をこじ開けるために、もう一度詠唱を始める。そのときだった。

大地に停滞する発光する魔力がゆがむ。曲線を描いて光が走る。それが円形となって完成する前に、アヤカは叫んだ。

「緊急通達！ 即刻結界を張りなさい！」
『了解！』

虹色に霞がかった円の中から黒い風が吹きすさぶ。破滅の色を思わせるその風は、今まさにアヤカを飲み込まんとしていた。

ブログ 前編（後書き）

こんにちは、あるいははじめまして、YENAと申します。

この小説は当初Arcadiaに投稿したものをYahooブログに改定して再投稿、さらにそこからほぼ書き直してこのサイトに投稿しています。

その二つのサイトで同じ設定の小説を見た方へ。私は本人です。

なんというか、二度もWeb上に出戻ってきて汗顔の至りなのですが、やはりこの作品を完結させたいという思いが強く筆を取っただいです。

さすがに誹謗中傷は受け付けておりませんが、自らの尻を叩くために厳しいご指摘もお待ちしております。どうぞこれからよろしく願います。

プロローグ 後編

吹き上げる黒い風に大気が揺れた。トランシーバーの向こうで動揺を含むざわめきが聞こえる。アヤカは内心舌打ちして再度詠唱を開始した。

「汝はミエザの教え子。東征の逸話の続きを綴ろう。たとえ病に倒れども——つとお！」

黒い風を白鳳を斜めに倒して回避し、そのままアヤカは詠唱を続ける。
ケイツ・ハリー

「……その足跡はここに続く。私は東の果ての女にして争いを言葉で綴る者。血肉を鋼に変え、いざ来たれマケドニアの王！」

くるりと回転しながら地面に一度視線を向けて後続がないことを確認すると、上空に向かって術を発動する。

「——アレクサンダー
機械仕掛けの王！」

要塞のような鋼の巨躯が空中に出現する。目指すは上空へと昇った黒い風。不定形のそれがこちらを狙って降下しようとしているのを機械仕掛けの王の視界で捉えて攻撃の意思があるのを認め、召喚獣の力を解放する。同時にアヤ力は再詠唱。

機械仕掛けの王 から白銀の光弾が無数に放たれ、黒い風を打ち据える。風は攻撃を食らってえぐれ、その形を変えながらもひるまず機械仕掛けの王に突進する。そして激突。機械仕掛けの王は魔力が変じた自らの破片を撒き散らしながら霧散した。だがその下にアヤ力を乗せた白鳳はいない。

《フウ、ウルルルル……》

「……危ないなあ、もう」

黒い風は今、アヤ力を見失って地上すれすれの場所でぐねぐねと形を変えながら周囲を索敵しているようだった。アヤ力自身は先ほどの詠唱で機械仕掛けの王に隠れて、包んだものを不可視にし、内部の魔力を隠蔽する布型の召喚獣 不可視なるものを発動して難を逃れていた。

今現在一番の問題は、眼前のあの黒い風への対処法。二番目はこの情報を持ってきた師補のこと。本当は海外での初の単独任務と言うことでわりと簡単な仕事が割り振られていたはずだったが、ふたを開けてみればほらこのとおり、だ。厄介極まりない。

「この場所は、確かドルイドの祭儀場だったかな……ドルイド……」

ケルト神話……黒い不定形の巨大な存在……まずい、まずいよこれ。予想通りなら私一人じゃ荷が重いつて」

このまま隠れていたかったが、こちらの姿が見えないとあの黒い何かが周囲にその矛先を変えるかもしれない。それは非常にまずい。しかし、予想通りなら本来は正統召喚師数名に正召喚師十数名、さらにほかの職員も二百ほど集めてやるような仕事だ。今ここに召喚術を使える者はアヤカしかない。その事実と現状に嘆息し、アヤカはひとつ覚悟した。

「しょうがない……腹をくくるか。あーあ、ゲームやりたかったなあ……無事に帰れたら夏休み中休暇をもぎ取ってやるんだから、覚えておきなさいよおじいちゃん……！」

『ご無事ですか、“暴君”』
タイラント

「ああ、うん。大丈夫です。でもこれからたぶん、大丈夫じゃなくなる」

狙撃班のひとつから通信が入り、アヤカが返答すると通信先で動揺が広がる。

『そのようなことをおっしゃらないでください。あなたはまだ若いんですよ！？ 撤退命令を！』

「いけません。あれを放置すればどうなるかわかりません。そしてあれの目的が何なのかわからない以上、この場は再封印が最もベタな判断でしょう」

『そんな……』

ああそういえば、とアヤ力は思い至る。彼には自分と同じ年頃の息子がいればはずだ。まだ準召喚師になりたての、現場にすら行っていないくらいの新入だと聞いていた。まだ将来有望かそうでないかわからないくらいだったけれど、アヤ力は思う。召喚師として、強くなりますようにと。私よりもっと強く、友達や家族を悲しませることのないように。

「だから……結界班。あなたたちには私に付き合ってもらいます」

途中で全部の回線に一方通行で声を送り、アヤ力は淡々と告げる。

「私が囹になつてあれを二重空間の出入り口に叩き込みます。おそらく私も突入することになるでしょう。ですから全結界班に告げます。私が突入後封印を施し——私を殺しなさい」

そしてアヤ力は一方的に通信を切った。後悔はあるけれど迷いはない。それが召喚師だからと、それが自分の姿だからと、アヤ力はそう信じている。

「星は天に輝けど、それは過去の残光でしかなく。されど人は夢を見る。漆黒の海に想念を描き、月を越え、陽^ひを越えてはるか遠くへ

往くだろう」

まだあると思っていた明日が消える。祖父への腹いせに奇妙な土産を買おうとしていた小さな野望が潰える。友達と遊ぶ約束が反故になる。父にしかつてもえなくなる。もう母の手料理が食べられなくなる。姉の歌が聞けなくなる。兄と喧嘩できなくなる。それらがほんの少し悲しかった。

「星の光は過去の残光。それは今から未来へ届く光の標^{しるべ}。暗き海を越えていざや来たりて、過去の夢をつむぎ続けよ。その夢は赤く輝き、阻むものを打ち砕く！」

もうこのトランシーバーは使わない。インカムごと体から引き剥がして、黒い何かのほうへ放り投げる。それに気づいた黒い何かは自らの一部を固めてうるこに覆われた尾を作り出し叩き落す。黒い風が不可視のアヤカへと突進し、アヤカはすれ違いざま召喚術を發動した。

「召喚、^{アーク}星天の箱舟！」

真っ赤な満月を思わせる魔法陣が青い空に展開される。その表面で輝く光が形を作り、押し出されるように膨らんではじけた。光の中から現れたのは、いくつものプロペラが回る金属の船だった。

「あらゆる拘束を引きちぎり、すり抜けるロキの仔よ、ついにグレイプニルに囚われた汝の影を我は求む。召喚、拘束される影」

変身能力を持った召喚獣に自分の似姿をとらせ、アヤカは不可視なるものに包まれたまま白鳳から星天の箱舟の甲板に飛び降りる。結構な高さだったが、自分の魔力でできたものでは傷つくことはない。

そうして残った自分の偽者と白鳳を二重空間の入り口に向かわせ、星天の箱舟で邪魔をするふりをする。不定形の存在にこの程度の障害物はないも同じだ。案の定黒い風は星天の箱舟をすり抜け召喚獣を追った。そして、それを追いかけてアヤカも二重空間に突入する。やはり内部は不安定なのか、突入した時点で自分から離れていた二体の召喚獣とのつながりが切れてていたからだ。

虹色に光が揺らめく空間がまぶしく、アヤカは目を細めて星天の箱舟の感覚に頼って空間を抜ける。光に激突したらどうなるのか考えたくもない。背後の入り口が閉じる。それでもう戻れない。心の中で顔が浮かぶたくさんの人に謝って、アヤカは突き進んだ。

やがてステンドグラスの半球の内部のような空間に出た。大地は荒れた廃墟が広がっていたが、空のモザイクパターンは不規則に組み変わり、色が変化し、美しく輝いている。そしてこの空間の中央に黒い何かはいた。

《ぐぬ……出入り口が……謀られたか！》

黒い風が回る。黒い風が形を作る。それは、雄羊の角の生えたドラゴンだった。アヤカの予想を肯定する要素がひとつ加わった。

《小娘、我らをたばかったこと後悔させてくれる！》

「私に喧嘩を売ったこと、後悔させてあげるわ！」

《人間、人間……！ 殺すツツ……！》

「もう少し付き合ってもらわよ…… クロウ・クルーウアツハ！」

クロウ・クルーウアツハ。ケルト神話において、アルスター南部にて信仰されていた神だ。これだけでも手に負えないというのに、この神は豊穡だけでなく戦いをもつかさどっている。

神の専門分野においては、人間はその足元にも及ばないと言われている。ただでさえ人間が神を殺すことは困難だと言うのに、神は即時的な手段では根本的にその存在を抹消するのは不可能だ。さらにこの神の本質は不定形の闇、あの黒い風だった。それに傷つければダメージを与えられる器官など存在しない。つまり、物量によって敵をすりつぶすほかない。アヤカ一人でそれをしようというのははっきり言って無謀だった。

（魔力回復薬液の手持ちは予備を含めて6本。分量は一本で私の魔力総容量の6割が回復するよう調節してある。今の魔力残量は6割…… ザコの掃討戦だって聞いてたからあんまり持ってきてないのよね。イギリスに来てほかに仕事をしたけど、そのとき消耗しなかったのが幸運だったかな…… 一番強い術は…… 無理か。強力な代わりに魔力の消耗が多すぎる。一回召喚しただけで残りの全部持っていかれちゃうし…… 強いけど無駄が少ないからこの星天の箱舟が一番ね。

ほかの召喚獣を呼び出す余裕はないと思っ
ていい……こっちは魔力が尽きるまで打ち続けるしかないのに、あつち
は耐えるか避ければいい。もしかしたらそれすら
必要ないかもしれない。考えれば考えるほど
どん詰まりよね。嫌になるわ。でもやるしか
ない……だから！

アヤカはラインを通じて星天^{アーク}の箱舟に魔力を注ぐ星天^{アーク}の箱舟は形を変え、巨大な機械人形へと変化した。その肩に
いるアヤカはこちらへ突き進んでくるドラゴンにまっ
すぐ視線を向けた。その瞳に赤い光が揺れて
いる。それは呼音の血族の証で、普段は抑制し
ている魔力が解放されたときの兆候だった。今
のアヤカに、それを抑える余裕はなかった。

「放てええええッッ！！！」

《ぐぬっ！？》

アヤカの怒号とともに星天^{アーク}の箱舟から幾筋もの赤い光が放たれる。それは空気を焼き、避けることができなかったドラゴンに真正面から襲い掛かる。いくつもの巨大な穴がうがたれたドラゴンは姿を崩し、風となつて虚空を滑る。

数瞬を置いて星天^{アーク}の箱舟の横合いに太い尾が形成され、それを予想していたアヤカは振るわれた尾を回避させた。それでも尾の先端が星天^{アーク}の箱舟をかすめて振動がアヤカまで伝わった。振り落とされそうになるのを必死にしがみついてこらえる。

一度離れようとしている黒い風に赤い光を一本追い討ちに放つが、これはやすやすと回避された。そしてアヤカは勝機を見る。避けた

と言うことは、少なくとも効くということだ。

アヤ力はその間も命中率を上げるため風に追いつがる。狙撃は苦手だったが、近ければ大きな的をはずすほど致命的な下手糞ではない。

《小娘がッ、舐めおつて！》

「貰ったア！」

二重空間の壁に近づき、逃げにくくなった風が反転し、ドラゴンとなって星天^{アーク}の箱舟に向かう。アヤ力にはやりと笑い、星天^{アーク}の箱舟から飛び降りる。

星天^{アーク}の箱舟をそのまま突っ込ませ、内部に残っている魔力をすべて攻撃に転化して打ち出す。黒い風がはじけ飛んだが、分かれたただけで倒すまでにはいたっていない。魔力が3割を切ったアヤ力は^{エーテル}魔力回復薬液を取り出しながらもとも消費魔力が少なく、なおかつ飛べる召喚獣を呼び出すために詠唱に入る。

「その声を響かせよ、ソロモンの精霊——^{ヴァルフアーレ}白き靈竜」

白い仮面のような頭部に白い胴と翼、赤い鬣の細身で小柄な竜が現れる。アヤ力は白き靈竜^{ヴァルフアーレ}に掴まって減速し、^{エーテル}魔力回復薬液を一本飲み干した。その間に散り散りになった黒い風が再度集まってドラゴンの形が形成される。

ドラゴン^{アーク}がアヤ力に向かう。アヤ力は地面すれすれを逃げながら再度星天の箱舟の詠唱を完成させるが、まだ召喚はしない。

じわじわとドラゴンが距離をつめる。廃墟を縫うように飛ぶアヤカと、障害を無視できるドラゴン。どちらが速いか言うまでもない。

《追い詰めたぞ小娘！ お前を食らってくれるわ！》

そして、ドラゴンがアヤカの眼前に迫る。そのあぎとを大きく開き、今まさに食らわんと咆哮するドラゴン。その瞬間、アヤカは星天の箱舟をドラゴンの背後に召喚した。同時に赤い光が放たれる。ドラゴンの黒い体が引き裂かれ、アヤカの背後へ吹き飛んだ。アヤカは反転して星天の箱舟へ飛び……

《逃さんッ！》

「きゃあっ!?!」

その背後から、衝撃が襲う。アヤカは短く悲鳴を上げとつさに魔力を体表に固めて体を守ろうとするが、この空間の物すべてが魔力を帯びているのか、二度三度体がバウンドして止まるころにはアヤカは全身を強く打ちつけ、無数の擦り傷を作っていた。さらに。

（あ、やば……右腕が折れたかも……呼吸するたびに胸が痛いし、肋骨にもひびが入ったかな……左足首の感覚もないし）

灼熱する痛覚がアヤカに『逃げろ』と訴える。しかし、そんなこ

とが出来るはずもなかった。逃げ場がないのもそうだが、アヤ力は逃げるなどという選択をとりたくなかった。それをなぜと問うならば、答えはひとつしかない。アヤ力は、召喚師であり続けたいと願っていたからだ。

どの道自分は死ぬ、とアヤ力は分かっていた。たとえ目の前の竜神を打ち倒したとしても、この場所で飢えや渴きで死ぬしかない。だからここであきらめてもよかった。もう封印を強化する時間は稼げただろうから。

ウエストポーチから転がり落ちた魔力回復薬液のビンが割れているのが転がったままのアヤ力の視界に入る。どうやらここは広場だったらしく、中身をかぶった石畳が水分を吸って黒ずみ……ちょうどそこが広場の中央だったせいかな、そこにあったモニュメントも魔力回復薬液をかぶっていた。さびと埃で形のわからなくなったモニュメントのひびがぼんやりと輝き、ぼろぼろと表面が剥がれ落ちる。アヤ力は中から現れた鋼のきらめきに一瞬目を奪われた。

魔力回復薬液は飲めば魔力を回復させるが、古い物を元に戻す効果はない。それはつまり、このモニュメントに何か魔法が施されているということだ。> 魔力回復薬液をかぶっていたことでそれが息を吹き返したのだろう。

そして、アヤ力はもう一度自分の結末がどうあがいても同じだということを出す。それでもあきらめたくなかった。自分が召喚師であることを。アヤ力はモニュメントにすがりついて立ち上がる。その瞬間、がりがりと魔力が削られめまいを起こす。モニュメントがアヤ力の魔力を吸い上げていた。音を立ててモニュメントの表面が剥がれ落ちる。その下にあったのは、剣だった。鋼の表面に七色の光が水泡のように浮かび上がる。全体が美しく生まれ変わったそのの刀身は優美な白銀で、柄とつばは黒味を帯びた金属の、曲線と鋭角で構成された片手剣だ。まるで脈打つように光が明滅し、急激に魔力を消耗している反動でアヤ力の思考がくらくらと薄れていく。

《馬鹿な、お前がなぜその剣を扱える！？ その剣を扱えるのは
――ナ神族の王族と、その剣を鍛えなおした1000年前の魔術師の
み――まさか》

アヤカはぼんやりとした頭でドラゴンの言葉を聞いていた。驚愕
と恐れが入り混じったその声は震えている。破れたウェストポーチ
から携帯電話が落ちて、オルゴールの着信音をならして地面で震え
た。

黒い風が何か言っていたが、アヤカにはもう聞こえていなかった。

（おじい、ちゃ……）

剣から光があふれる。アヤカのすべてが光の中に沈む。

そしてこの日、アヤカはこの世界から姿を消した。

プロローグ 後編（後書き）

Q 何でアヤカの召喚術がFFなのん？

A 彼女の趣味です。

1 目覚めと、邂逅。

きしり、みしりと体の痛みでアヤ力は目を覚ます。

「あ、う……痛い……」

うめいて、その場所の埃っぱさに思わず咳き込む。肋骨がさらに痛んでアヤ力は無言で悶絶した。周囲を見回すと、ここはどうやら廃屋らしかった。ぼろぼろの天蓋ベッドに、風化して破れ、ぐずぐずになったカーテンの成れの果て、埃にまみれてよくわからないなにか。そしてそれらをどかして埃を払った床板の上に赤黒い液体でかけられた魔法陣。その中央にアヤ力は横たわっていた。埃のにおいに混ざった鉄錆のそれに液体が血だということがわかる。

周囲にあの神の気配はない。ここがどこで自分はどうなったのかアヤ力の脳裏に疑問が浮かぶが、今は痛みに多くの思考力を削られて、ろくにものが考えられなかった。

アヤ力はとりあえず痛みが少なくなるよう寝返りを打つ。すると魔法陣の脇に黒い何かが横たわっているのが見えた。薄暗い室内ではそれが何かを判別するのに数秒かかった。黒い子猫だ。じわじわと横たわったからだから血がにじみ出ていることと、腹部が上下していることを見て取ったアヤ力は自分の体を引きずって子猫のそばに移動する。そして召喚術を詠唱した。どれだけ気絶していたかわからなかったが、その間に魔力はほとんど回復していた。

「……神の愛に体を燃やす熾天使、彼らのささやきを、恩寵をここ

に導く。聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな……召喚。熾天使の翼^ム」

魔力が空中で無数の白い羽に変化する。傷ついた部分にふわふわと舞い降りて、全身から痛みが引いていく。ピクリと動いた子猫を抱き上げて、アヤカはほっと息をついて怪我の消えた体で立ち上がった。

「それにしても、ここ、どこなのかしら。あの剣にしがみついて立ち上がろうとして……その後の記憶が飛んでるし。気絶でもし、たふえつくしゅ！」

鼻のむずむずに耐え切れずアヤカはくしゃみをする。考えるのは後でもいい、とアヤカは窓を開けて空気を入れ替え外を眺めた。

眼前には荒れ果てた庭が、その向こうにうつそうと生い茂った森が広がっていた。何処だココ。空を見る。真っ青な雲ひとつない空が広がっている。けれど、そこに球体にこうもりの翼をつけたような謎の飛行物体がちらほらと見えた。マジで何処だココ。

とにかく誰かに連絡をと思ってアヤカは携帯電話を探すためウエストポーチを探る。けれど、ない。気絶する直前落としたのを思い出して、そのあたりの床を探し回る。最初にアヤカ自身が倒れていた場所に、まったく光らなくなった剣と一緒に転がっていたのを見つけて一安心、と思いきや、ディスプレイには圏外と表示されていた。

「厄日だ……」

剣のことはひとまず置いて、アヤ力は呆然とつぶやいた。師補にだまされるわ神と戦う羽目になるわりアル比喻でなく本当に骨を折るわ迷子になるわと散々である。死ななかつたのが不幸中の幸いか。しかし謎の飛行物体が振り向いて、こっちに巨大な一つ目で狙いをつけてきた時点でアヤ力は悟る。まだ災難は終わっていない。いやな予感がして壁に身を隠すと、まばゆい閃光が一瞬窓から室内を照らし、光が照射された床や散乱したものが石化する。携帯電話の表示を鏡面に切り替えて窓の外の様子を見る。ぞくぞくと一つ目の飛行生物が集まってきていた。

そして同時に森の中に集まっている魔物たちも多かった。その場所には何かあるのかと少し観察していると、一本の光が上空に伸び、それに当たった魔物が落ちた。召喚師が何かが交戦しているのかと考えるのと同時に、アヤ力の脳裏で、魔物に襲われている＋颯爽と助けに現れる＋恩に着せて道案内させる＝現状の脱出、の方程式が出来上がった。善は急げとアヤ力は詠唱を始める。

「汝は赤き石にして海を漂う獣、我は汝の幸運を求めよう。魔なるものを寄せ付けず、我に続き来たれ……燃える石の獣」
カーバンクル

深みのある青い瞳に、エメラルドを繊維に仕立てたかのような毛並みの獣。その額には球状の赤い宝石が第三の目のように光を反射している。額の宝石を貴店にある程度の威力までの魔法を反射できるシールドを張ることが出来る召喚獣だ。その一抱え程度の大きさの召喚獣はそのまま狭い窓をくぐって外へと駆けていった。時折魔物から光が放たれるが、燃える石の獣へ影響を与えることができない。カーバンクル
そのまま取り逃がす。魔力の塊に物質を変化させる魔法は利かない

のだ。

「さてと、露払い露払い」

カーバンクル
燃える石の獣を操作しつつ、アヤ力はさらに詠唱する。

「我が三騎士と呼ぶものの力を束ね、戦いのさきがけを勤める竜よ、鮮やかな翼を広げ、その威容を示せ。ヴァルガリマンダ比翼の魔竜」

携帯電話の鏡面に鮮やかな色彩のドラゴンが現れる。頭部から尾にかけてグラデーションがかかったように色彩が滑らかに変化する体表、同様な色彩の羽が生えそった翼。すこぶる目立つければしい外見だが、氷、雷、炎の三属性を任意に放つことができるためなかなかオールマイティな攻撃用の召喚獣だ。そのまま上空を旋回させ、ひたすら魔物に向かって落雷を落とす。これで周囲の守りはいいだろう。アヤ力は燃える石の獣カーバンクルのほうに意識を傾ける。

どうもこの森は非常に深いらしく、樹齢千年程度では利かない巨大な広葉樹がその枝を広げるだけ広げながら生えており、森の中は非常に薄暗くてじめじめしている。下草はほとんどなく、緑と言えば落ちた新鮮な木の葉やコケくらいなものだ。

召喚獣は特有の感覚を互換に変換してものを感じているため、人間に備わっていないはずの感覚が使えたり、その逆の召喚獣も存在する。新月の夜でも満月が出ている程度には周囲は見えるし、しかもその視界は360度にわたっており、死角はない。逆に味覚は鈍く——戦闘では必要のない感覚なのであまり困らないが——

——寒冷や湿度にいたってはもはや感覚ではなく数値のデータでした

情報が受け取れない。それはそれで便利だが、生身の生物と比べるとずいぶん違和感のある感覚だった。とはいえ10年近く親しんできた感覚なので、アヤカにとって違和感も何もないのだが。

その召喚獣の視覚にひとつの人影が映る。森に入るにしてはずいぶんの布のあまった服装をしていて動きにくそうな人物だ。長いひげを見るに、相当に年を取った老人なのだろう。老人は巧みに杖を振って淡く輝く壁や光線を出して魔物に対抗している。しかし次から次に魔物がやってくるため、このままではジリ貧だ。と、言うわけ――

『キュルイーっ！』

魔物を振り切って、燃える石の獣に老人の近くで能力を発動させる。老人の張った光の盾を覆うように、魔法反射シールドが形成される。

「……ほ、これはまたかわいらしい助っ人じゃのっ」

老人は英語でつぶやきひとつ息をついて杖を下ろす。半月型のレンズを使ったメガネをかけ、ベルトに長いひげを挟んだ老人は、しわくちゃな手で燃える石の獣の頭をなでた。その容姿を文字に変換してイメージすると、アヤカは奇妙な引っ掛かりを覚えた。どこか見たか聞いたかしたような、と。

アヤカは仕事上多くの言語の習得を薦められていたため、英語はネイティブ並みに話せたので燃える石の獣を一礼させて話し始める。

『始めまして、ご老人』

「その声は娘さんかの？」

『アヤカと申します。このような姿で現れたこと、ご容赦ください。なにぶん危急の事態だったようですので』

「ふむ？ まあ気にすることはない。わしも困っておったところじやしのう」

会話の最中も魔物が石化の光を放ち、それを反射されて逆に倒されるなどということを繰り返しているうちに、とうとうあきらめたのか方々に飛び去ってゆく。それでも一応シールドは張ったままにしておいてアヤカは燃える石の獣越しに会話を続けた。

『ご老人、名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？』

「わしかね。わしは——アルバス・ダンブルドアという者じゃ」

アヤカの思考に一瞬の空白が生まれる。アヤカ本人が床に転がった剣に視線をやって、まさかと顔を引きつらせた。

（そんなまさか……あの剣は、私を、ハリー・ポッターの世界に連れてきたとも言っの？）

ヴァルガリマンダ

比翼の魔竜を少し上昇させて森の向こうを見る。すると古い大きな城が建っていた。それが老人の話に信憑性を持たせる。

ハリー・ポッター。魔法使いがひっそりと生きるヨーロッパで、かつて魔法使いたちを恐怖に陥れていた悪の魔法使い、“闇の帝王”ヴォルデモートと、ヴォルデモートが自らのどちらかしか生き残れないと予言された少年ハリー・ポッターを中心としたJ・K・ローリング著作の児童小説、それが『ハリー・ポッター』だ。アルバス・ダンブルドアは主人公ハリーを導く立ち位置にいる重要人物で、アヤカが読んだばかりの6巻ではこの老人の葬儀のシーンで終わっていた。つまり、ダンブルドアは死んだのだ。最終巻である第7巻ではダンブルドアの庇護を無くしたハリーがどう立ち回ってヴォルデモートを倒すのか、アヤカも期待して来年を待っていた。

(……は、あははは、そんなまさか。インターネットの小説にあるように、物語の世界に入り込んだ現代日本の人間が主人公のお話じゃあるまいし……まさか、まさかよね?)

「先ほどから黙っているが、どうかしたかね？」

『あ、いえ、その、今置かれている現状に困惑しております……私はアヤカ・ミヤマと申します。つかぬ事をうかがいますが、今は何年の何月何日でしょう?』

「1991年の7月28日じゃが」

アヤカは気絶しなくなった。記憶のとおりならば、後二日後にハリー・ポッターは11歳の誕生日を迎え、彼の元にホグワーツの入

学許可証が届くはずだ。

『すみません。どうやら私が置かれた状況は予想よりも深刻なようです。ぶしつけなお願いで大変申し訳ないのですが、私の元にお越し願わないでしょうか？』

「君は今何処におるのかね？」

『森のほぼ中央部にある古い……外観は要塞に見える巨大な廃屋の中です』

「要塞！ なるほど、1000年前の……スリザリンが建築した……ああ、かまわんよ、もとよりわしの目的地もそこだったのでは」

『恐れ入ります。これより『足』を呼び出しますので、攻撃なされないでくださいね？ では——召喚、チヨコボ幸せの黄色い鳥』

召喚獣による召喚術の実行は、魔力に余裕があればその分だけ使用することができる。カーバンクル燃える石の獣は中位程度の召喚獣だが下位の数体程度なら間接召喚できる。

チヨコボ幸せの黄色い鳥は名を呼ぶだけで召喚可能な最下位にして最弱の召喚獣で、騎乗するためのものとしてはそれなりに便利な召喚獣だ。そうして馬ほどのある体躯の頑丈な脚の黄色い鳥が現れ、ダンブルドアの前でかがんだ。

『どうぞお乗りください』

「なんとまあ愛嬌のある鳥じゃの」

『それほどスピードは出しませんが、落とされないよう捕まっていますね』

『きゅい』

ダンブルドアの乗った幸せの黄色い鳥が燃える石の獣を猫のよう
にくわえて走り出す。

『あのですね、実は私は迷子です。仕事でイギリスに来ていたところ、事故で要塞に迷い込んだのです。』

気づけば要塞は謎の飛行生物に取り囲まれ、さらにはここがどこかわからない状態でした。生き物のほうは追い払うか打ち落とすかしましたが、周囲の様子が変わらないことには移動もままなりませんから大変困っていたのです』

「それはずいぶん難儀だったのね」

『はい、まったく災難でした。ところで先ほど私がいる要塞に用があるとおっしゃいましたが、このような危険な場所などついぞ知りませんでした。ここは一体何なのでしょう？』

「ふむ、そうじゃのう……そのまえに、君がどうしてそこに現れることになったのか、詳しいことを聞いてもよいかね？」

アヤカは数秒沈黙して考える。たとえばこの世界がハリー・ポッターの世界だったとして、本に記されていておりの名前と容姿をもつ人がいたとしても、中身まで同じとは限らない。実はこのアルバス・ダンブルドアという老人はグリンデルバルドと組んで魔法使いによる世界征服をたくらんでいるパラレルワールドの存在かもしれない。それとも名前と姿を騙った偽者かもしれない。とりあえず差し障りのない範囲で本当のことを言ったが、何かたくらんでいないとも限らない。

しかし、だ。そんなことは考えてもしようがないことなのだ。ここがハリー・ポッターの世界であろうとなかろうと、本にあったとおりの世界であろうとなかろうと、アヤカにとって情報源は彼以外にいないのだから。

『私がこれから話すことは、いささか信じがたい話です。とりあえず最後まで聞いていただけますか？』

「もちろんそのつもりじゃ。さ、話してみなさい」

『まず単純に結論だけを申し上げるのならば、私は異世界からきました』

「ふむ」

ひげをなでて考え込むダンブルドア。とりあえず否定する言葉が出ないことに少し安堵して、アヤカは話を続ける。

『私の世界において、魔法使いは私の血族しか存在しませんでした。

過去にはいたのですが、歴史の中に埋もれて消えてしまったのでしよう。

私の一族は人間に害をなす魔物の対処、危険な魔法的物品の処分管理を勤めています。私もその一環でイギリスに来たところ、予定されていた仕事の情報と現状がかわみ合わず、装備・人員の足りない状況で強大な相手と戦うこととなりました。

なんとか相手をもといた場所に押し込んだのはいいのですが、戦う過程で私もその場所へ閉じ込められることとなりました。

戦っている最中その地にあった魔具マジック・アイテムに触れたところ、なぜかここへ飛ばされてしまったのです」

「体は大丈夫かね。怪我はしておらんか？」

『お気遣いありがとうございます。ご心配なく。すでに自分で治療しました』

まず最初に初対面の謎の人物への気遣いが出てくるあたり、いい人なんだなあと感じてアヤカの心にじんわりと来るものがある。相当参っていたことを自覚して、不必要な感傷だとアヤカはそれを忘れるよう勤める。召喚師として、自分はまだ理想には遠いとアヤカは内心嘆息した。

「さて、わしはここから南にあるホグワーツという学校で校長を務めておる。異世界から来たという君の話じゃが、わしはその話が信じるに足るものだと考えておる」

『われながら胡散臭い話だと思うのですが、信じてくださるのですか？』

「なあに、わしは人より少し長生きしておるからな、少しばかり物知りなんじゃよ。君の話は信じるに足る根拠がある」

（確かダンブルドアの年齢は約150歳だとか何とか……それって『少し』なんだろうか。というか、根拠ってなんだろう）

ダンブルドアの言葉にそんなことを考えながら、はあ、とアヤカは生返事を返す。

そうこうしているうちに周囲の木々の丈が低くなり茂みに覆われた森の端に幸せの黄色い鳥がたどり着く。チヨコボ要塞の周囲は少し開けているため、一度幸せの黄色い鳥の足を止め比翼の魔竜に周囲を索敵させるが、先ほどの魔物は出てくる気配がない。

鮮やかな威容を誇る比翼の魔竜を警戒したダンブルドアが杖を抜くが、幸せの黄色い鳥が先ほどまでと同じペースで進み始めたためヴァルガリマンダ杖を比翼の魔竜からはずした。

チヨコボ森から幸せの黄色い鳥が出る直前、召喚獣の視界におかしなものが引つかかる。手のひらサイズの透明な六角形が無数に組み合わせられた幕が、要塞の周囲を囲むようにして虹色に光を反射していた。開けた場所が丸ごと膜に包まれている。カーバンクル燃える石の獣が出る時には感知できなかったものだ。一度燃える石の獣をおろして触れてさせみるが、すり抜けるばかりで手ごたえはない。

『おかしいですね。カーバンクル燃える石の獣が出るまではこんなものはなかったと思います』

「ふむ、これは……む!？」

ダンブルドアが何かを言いかけたその瞬間、背後の茂みが風もなくざわめいた。ダンブルドアが背後へ杖を向けるのとはほぼ同時に閃光が周囲を襲う。もちろん燃える石の獣の結界に阻まれ光はダンブルドアに届かない。同時にアヤカは比翼の魔竜ヴァルガリマンダに指示を出し、雷がダンブルドアの頭上を走り茂みを轟音と共に穿った。

焼け焦げ吹き散らされた茂みの中に炭化した魔物が転がるのを見て、かばった覚えのない要塞の周囲に被害がまったく及ばなかつことをに気づき、この虹色に光を反射する幕はあの魔物からの攻撃を防ぐ役目を果たす結界なのだとアヤカは理解する。

「今のはさすがに心臓に悪いのう」

『申し訳ありません。反射的に攻撃をしてしまいました』

「いやいや、君がいたからわしは助かったのじゃから、気に病むことではないよ」

『ありがとうございます……それより、この幕は安全な結界だと思いますが、どう思われますか？』

「君と同じ意見じゃよ」

目前の結界は安全だと考えて幸せの黄色い鳥が前に進む。チヨコボ案の定、何も起こらず素通りできた。出入りが自由なことも燃える石の獣で確認する。

アヤカは安堵の息をついて今いる部屋を見回してみた。改めて注意を向けてみれば、心なしかボロボロだった室内がきれいになった

ように見える。いや、気のせいではない。

もはやごみとしか思えなかったカーテンはくすんではいるもののカーテンだとはつきり判別できるほどに復元され、床も穴が開いていた箇所などまったく見られない。ベッドとて折れていた柱が元に戻っている。

疑問に思いながらもアヤ力ははまだ眠る黒猫を見る。すうすうと静かに寝息を立てる無垢な黒い子猫。魔法陣に横たわっていたこの猫は生贄としてささげられたのか、それとも――

1 目覚めと、邂逅。(後書き)

Q 召喚師って厨二病なん？

A はい、厨二病です。召喚師は皆厨二病患者ではなく厨二病です。
ここ重要。

2 困難は、行く手を阻む。

アヤカはダンブルドアを迎え、もはやほとんど復元された要塞の食堂で話を聞いていた。

「ホグワーツ魔法魔術学校は四人の魔法使いと魔女が作った学校じゃ。」

今より1000年前、イギリスは今と違って外洋からの侵略に繰り返しさらされ、ブリテン島の覇権を握らんとする国々が争い、まさに戦国時代にあった。

そんなさなかに魔法族の存在が非魔法族、すなわちマグルに露見すればどうなるか分かるかね？」

「戦争の駒として取り込まれるか、異端の敵として排除されるかのどちらか、ですね。少なくとも平穏に暮らすことは無理だったでしょう。」

「うむ、そのとおりじゃ。ホグワーツの四強はそれを避けるため、自分たちだけのコミュニティを作ろうとした」

「その足がかりがホグワーツ、と？ 確かに子供の価値観を統一するのに学校教育は有用ですが、なかなか大掛かりな取り組みですね。教育によって魔法族と非魔法族の差別化を図り、魔法族だけで一致団結するよう……言い方は悪いですが、思考誘導したわけですか。その結果が主にヨーロッパに隠れて分布する魔法界と呼ばれる魔法族だけのコミュニティなんですね？」

「うむ。ホグワーツの思想は寮と同じく四つに分化しておる。グリフィンドールの『決断力』、スリザリンの『計画性』、レイブンクローの『思慮深さ』、ハッフルパフの『協調性』。

この四つでバランスをとり、それぞれ微妙に違った思想で教育を施した。この四つの特徴は、時に強みに、時に弱みになるからのう」

「決断力は独断性に、計画性は陰湿な狡猾さに、思慮深さは優柔不断さに、協調性は日和見主義になりますからね」

「そのとおりじゃよ。そして四強はその『寮の性格』に派閥というものを組み込んだ。その芯にえられたのが、マグルへの認識じゃ」

「マグルと仲良くしようというグリフィンドールが左翼、排除とすべきというスリザリンが右翼、レイブンクローが積極的な中道、ハッフルパフが消極的な中道ですか」

「そうじゃ。彼らもそう主義主張しておったのじゃが、グリフィンドールは外患であるマグル心の底から取り込もうとしておったわけでもなく、スリザリンもマグルをすべて殺しつくそうとしていたわけではなかった。

ところが、じゃ。ここで大きな事件があった」

そもそもこの話はアヤカが要塞のことを尋ねてダンブルドアが長話を始めたのが発端だった。アヤカはそれまでの話を覚えながらも本題に入るのを相槌を打ちながら待っている。

「サラザール・スリザリンの長女が出かけた折に魔女であることがマグルに露見し、それはむごたらしく殺されたのじゃ」

「それはまた……反マグル思想を持つても仕方のない話ですね」

「うむ。ここからはわしの想像が混ざるのじゃが、怒り狂ったサラザールは反マグル思想を寮の垣根を越えて学生たちに植え込もうとしたことじゃろう。結果、ゴドリック・グリフィンとヘルガ・ハッフルパフの意向もあって、サラザールは学校を去ったとわしは考える。その際、サラザールがホグワーツの分校として建築していたこの要塞を下の息子に譲渡し、上の息子に自分の跡を継がせた。

この要塞を譲渡された下の息子の名はリチャード・スリザリン。空間に干渉する系統の魔法を編み出した不世出の天才じゃ。

後にリチャードはこの要塞に強固な結界を張り、この地を完全に閉ざして歴史上から消えたのじゃ。そして1000年もの間、この結界は破られなかった」

そんな記述は『ハリー・ポッター』の中にはなかったが、絶対にありえないと書いてないのも確かだった。シュレディングアの箱に閉じ込められた猫の生死は不明。箱が開かれたこの世界では、結果がこのように出てしまっている。

「わしが君の話信じたのは、ここがリチャードの住居であり、リチャードが空間干渉魔法の生みの親であることが理由じゃ」

「つまり、ここなら異世界からの人間が流れ着いてもおかしくない、とお考えのわけですね？」

「それに、事実君はわしの知らない魔法を使っておるしのう。リチ

ヤード・スリザリンは異世界へ移り住んだ、という説もあるくらいじゃからな」

「……私が世界を超えてここにたどりついたのも、こうして要塞が息を吹き返したのも、何か関係があるのでしょいか」

「おそらくそうじゃろう」

リチャード・スリザリンはいつたい何者なのか。それを紐解けば元の世界に戻る手がかりが得られるかもしれない。

となればこの要塞——欲しい。リチャードが自ら手がけた魔法がかけられたこの屋敷には、きつと手がかりが残っているはずだ。アヤカはなんとしてでもそれが欲しくなった。

だが、まずは。

「……とりあえず、脱出方法を探すより食糧確保を優先させませんと」

「そうじゃのう」

ヴァルガリマンダ

アヤカは比翼の魔竜が外側の結界を通過できなかったことに嘆息し、ダンブルドアも困ったようにひげをさすった。

この要塞は二重の結界で囲まれている。ダンブルドアが襲われた生物が生息するのは二つの結界の間の森だ。

ダンブルドアは外側の結界がとかれたことを感知して結界内部に入ったが、好戦的かつ強力な石化能力を持つ魔物が多数生息していることは予想外だったらしい。戦っているうちに森の奥へ奥へと入

り込み、気がつけば魔物の群れのと真ん中にでていたとのことだった。

ほんの少し様子を見て戻るつもりだったのだが、この誤算がダブルドアを大いに困らせていた。ホグワーツの近隣では空間転移：姿現しをすることも出来ず——空間干涉の結界の内部から出られるかは疑問だが——脱出不可能で絶体絶命な状況でアヤカが差し向けた燃える石の獣に救われた形となる。

脱出するとき森を強行突破するのは仕方がないだろうが、危険すぎて森を生活圏に組み込めるはずがない。つまり、可能な限り要塞とその周辺で食料を確保しなくてはならないのだ。

幸いにも結界を貫いて川が流れており、煮沸すれば安全に水を飲めることはダブルドアが魔法で確認していた。水を出す魔法はあるが出来る限り魔力を節約しておきたいのでこれはありがたい限りである。

ここから脱出するには一日二日では無理そうなので、食料を確保しつつ手分けして調べ物をする事となる。リチャードが何か方法を残しているかもしれない。

彼が自分というものを自覚したのは、あらゆる生命を焼く炎の中だった。

産声を上げたその瞬間、同胞たちは苦痛に叫び、炎の中で朽ちていった。その姿は今も脳裏から離れない。

痛い、苦しい、と怒り嘆く同胞たちに、彼は何一つしてやれなかった。彼は同胞たちと同じくその炎に恐怖し——逃げ出した。

それが、今から10年ほど前のこと。

「…………あれ？ さっきの猫じゃない」

この要塞は、外壁に張り付くようにして6つの建物が建っている。東西でシンメトリーを形成し、北から南へ三つずつ並んだ建物のひとつ、南西部にある建物がアヤカが召喚され、そしてアヤカが食料を探すため出ようとしている屋敷だった。

アヤカは玄関先で行儀よく座っている先ほどの小さな黒猫を見つけて抱き上げる。逃げる様子もなくおとなしく抱き上げられた子猫は小さく鳴いて赤い目を細めた。

「ん、怪我はないわね。感謝なさいよ、私があんたの怪我を治してあげたんだから。」

…………とはいえ、何で結界の内部に猫なんか…………まあいいか。今はそれより食料よね…………って、あ、ちよつと！？」

アヤカの手をすり抜けて黒猫が逃げる。小さく開いた玄関の扉をすり抜けて北へと走った。その先に、唐草模様の金属フレームに支えられたガラスの建造物があった。温室だ。

ダンブルドアと話している間に修復されたのだろう温室へ、黒猫を追いかけてアヤカは走る。せつかく怪我を治した動物が不用意に外へ出て魔物に襲われたら寝覚めが悪かったし、単純にあの黒猫が

気になっていたからだ。

「うわっ、青臭い……においのきつい植物が多いわね、ここ」

思い思いに背丈を伸ばしている植物は、かつてリチャードが手入れていた薬草やハーブだろう。食べられるものがないだろうかとアヤカは黒猫を探しながら視線をめぐらせる。

にいあ、と泣き声が聞こえた。草を掻き分けそちらへ足を向ける。やっこの思いで少し開けた場所に出たとき、アヤカは感嘆した。

色とりどりの花々がいつせいに咲き誇っている。そんな中、黒いものがちょこんと座っていた。

「まったく……要塞の外には出ちゃ駄目よ。怖いお化けに食べられちゃうからね」

にいあ、とアヤカに向かって日と鳴きした後、黒猫がざりざりと地面を引っかく。

そういえばこのあたりは丈の大きい草が生えてないなと思いつつ、アヤカは地面を蹴ってみた。土が雑草ごとえぐれて、その下から金属の何かが顔を出す。

アヤカが召喚獣を呼んで土を払わせると、そこに鉄の門扉が存在していた。開いてみれば、地下への階段が続いている。

「ここを教えてくれたのはお礼のつもり？」

にいい、と猫が鳴く。しかしアヤカは猫の言葉など分らないので、猫に話しかけている自分に苦笑して地下へと降りる。その腕には黒猫がすっぽりと収まっていた。

薄暗い階段をしばらく降りると小さなホールに出た。天井に光る石がはめ込まれ、ぼんやりと周囲を青白く照らしている。

ホールには何もなかったが、奥には両開きの扉があった。数秒迷って、召喚獣に扉を開けさせる。そのとたん、薄暗闇に慣れた視界が白く染まった。

一瞬の後に扉の向こうを見てみれば、そこには白い光が輝く果樹園があった。

甘い香りを乗せた風がアヤカの鼻腔をくすぐり、見ず知らずの場所に放り出された緊張もあって忘れていた疲労や空腹感を急に自覚する。真つ赤に色づいた小ぶりのリンゴをもうで口に運ぶ。酸味が強いが、紛う事なきリンゴの味だった。とりあえず数個もぎ取って、アヤカは急いで食堂へ帰る。

「おお、アヤカかね」

「ダンブルドア校長？ 早かったですね」

「いまこの南西部の建物を一通り見て回ったところじゃよ。君のほうは収穫があったようじゃな」

「はい、リンゴがなっていました。すっぱいですけど、ちゃんと食べられますよ」

「おや、かわいらしい連れじゃの……おっと、嫌われてしまったかね」

黒猫がダンブルドアの視線を察知してアヤカの足元に隠れてしまう。一度食堂へ戻ってきていたダンブルドアは本の体裁をなしていない冊子を持っており、黒猫よりそちらに注意が向いていたためかすぐさま視線が冊子へ向けられた。

アヤカが表紙を覗き込んでみるが、図面に書き込まれているのは古英語らしく、アヤカには読めなかった。

「なんです、それ」

「ここの設計図じゃよ。正確には分校の、じゃが。」

この南西棟は当初職員宿舎だったようじゃな。南東は厩舎、中央は東西ともども学生用宿舎、北部は西が実験棟で東が普通の教室じゃ」

「北のほうに温室がありましたけど？」

「それはリチャードが増築したもののようじゃの」

ダンブルドアが丁寧にページをめくり、指先を紙面にさまよわせて図面を調べているのをアヤカが眺める。しゃくしゃくとすつぱいリンゴをかじりながら、アヤカは手持ち無沙汰に椅子に腰掛けた。リンゴが芯だけになったころ、ダンブルドアの指が止まる。

「ふむ……アヤカ、温室があつたのはここかね？」

「あ、はい。そうです」

「ここに地下の入り口があるんじゃが……」

「リングはそのなんですが、どうやら地下が高度な魔法がかけられた亜空間になっているようです。とりあえずリングだけ持つてとっと帰ってきたんですけど」

図面の一点をダンブルドアがしわだらけの指で示す。その場所はアヤカも知っているあの地下への入り口だった。

「どんな様子だったかね？」

「そうですね……地面の扉をくぐると長い階段があつて、20メートルほど下ったところにちょっとした広間がありました。

その向こう側にリングの木やら何やらがあつたんですが、まるで太陽があるかのように明るかったです。詳しいことは調べていないので、知っていることはそれだけですな」

「ふむ……それでは少し調べて来ようかのう。ああ、君はここにおりなさい」

「ですが………いえ、わかりました」

ダンブルドアの言葉に反論しかけるが、アヤカはあっさりと引き下がる。

この要塞は外見に反して学校として建てられており、一部が増築されたり改築されてはいるものの、ここは『ダンジョン』ではなく

『家』である。

外敵、つまりアヤカやダンブルドアのような侵入者から内部を守るには、内部に仕掛けたトラップより外に住む魔物や外側の結界が有効だろう。事実、外側の結界は破られたことが一度もないし、ダンブルドアもあの魔物にはかなり追い詰められていた。

内部にトラップを仕掛けたならばその維持管理も必要はずだ。誤作動で仕掛けた本人がかかるなど笑い話にしか過ぎない。この広い屋敷の各所にトラップを仕掛けたのなら、その維持管理にどれほどの労力が必要だろうか。地下に果樹園を構えて森の中に引きこもりながらも自らの研究に精を出す偏屈な魔法使いが、そこまでの労力を払うだろうか。

だからおそらく内部に危険なトラップがあつたりはしないはずだった。多分。この世界の魔法についてはアヤカよりダンブルドアのほうが詳しいだろうから、アヤカの協力がなくとも大丈夫のはずだ。多分。

アヤカ自身も相当疲労しているため、この部屋でぐったりと休憩していたというのも本音だった。贅沢を言うなら、今すぐ風呂に入って寝たい。

その疲労は支援も情報もなく二度も戦った緊張による気疲れの部分が大きかったが、とにかくにも疲れていた。

しかし、その前にひとつやる必要がある。それに思い至って、アヤカはダンブルドアを見送るのだった。

「――極北の夢をささやく雪の母に抱かれ眠れ。召喚、氷の女王」
王

突如現れた青白い肌の女に首根っこをつかまれ、猫の悲鳴が上がる。

「で、あなた何者なわけ？ この屋敷内に上の召喚陣を引いた『人間』はいない。

あなたが地下に案内してくれたことはありがたかったけど、あなたの傷を治したことで貸し借りゼロよ」

小ぶりなりんごを片手で上に投げて受け止めるのを繰り返しながら、アヤカ自身の視線を向けずに猫に問う。

首の皮をつままれてぶら下げられているのにまったく暴れない子猫の様子に確信を強めながら、アヤカは最も重要な問いを投げかけようとしていた。

「——あなたが、私をこの世界に召喚したんでしょ？」

2 困難は、行く手を阻む。(後書き)

Q イギリスの戦国時代？

A 想像です。このころイギリスを含めたヨーロッパがしょっちゅう戦争を繰り返していたのは確かですが、それが魔法使いたちとどうのこうの、という描写は原作にもありません。

Q リチャード・スリザリンって？

A オリキャラです。故人。

3 子猫と、問いかけ。

アヤカの問いに、猫はのんきにあくびをする。

まったく分かっていない猫の様子を演技だと考えたアヤカは、猫から見えない入り口の扉のほうに視線を向けて、その演技を見破るために必要かつ簡単な言葉を口に出す。

「あ、ダンブルドアだ」

もちろん嘘である。いくらなんでもこんな早くダンブルドアが戻ってくるわけがない。とたんに暴れ始める猫に小さく笑い、アヤカはさらに続ける。

「そんなにダンブルドアが怖いのか？ はっきり言って、今のあなたにはダンブルドアより私のほうが怖いはずだけど。それと、ダンブルドアが戻ってきたって言うのは嘘よ」

何せ召喚獣で首根っこをつかんでいる状況なのだ。見た目どおりの丈夫さならば、術を発揮しなくとも召喚獣の腕に力を込めるだけですべてが終わってしまうはずだった。

『……っ、騙された……』

「それで、あなたが私を召喚したのよね？」

『……………。』

かわいらしい子供の声が子猫の口から漏れ出て、アヤカは再び問いかけるが猫は沈黙を返すばかりだ。

「私はね、別にあなたのことを恨んでるわけじゃないのよ。だって、私を召喚したのは偶然だったとしても、あの召喚によって実際私の命は助かったわけだし」

『え？』

「簡単に言っちゃうと、私はあなたに召喚される前にすごく強いやつと戦ってたの。そいつが巣から出てこようとしたから反対に押し込んで、入り口をふさぐよう部下に命令したの。」

当然その強いやつと二人っきりで巣の中に残ったわけだけど……大怪我をして絶体絶命ってところであなたに召喚された。

つまり、召喚者には恩を感じてるの。私が言いたいことはひとつよ。助けてくれて、ありがとう。

……誰が召喚したって確証が得られなきゃ、この言葉だって無駄じゃない？」

『……僕は、別に、君を助けるために召喚魔法を行ったわけじゃないよ』

「うん。でも、ありがとう」

氷の女王がそつと猫をテーブルの上に降ろす。そもそも、アヤカはこの猫に対して害意はなかったのだ。氷の女王を呼び出して猫を摘み上げたのは確証が欲しかったからで、ダンブルドアの名を口にしたのはちよつとしたゆさぶりをかけたに過ぎない。

なぜ氷の女王で猫を捕まえたかについては、答えははっきりしていた。疲れていたから動きたくなかった。それだけだ。

「……君、最初は僕を疑ってなかったよね」

「うん。でもさ、あなた、私があなたの怪我を治したって話を聞いてすぐ温室へ走り出したでしょ？」

ああ、これは私の言葉が分かってるんだな、ってすぐ分かった。後は芋づる式よね。

何かの間違いだったとしても、召喚された私の前に、召喚した誰かが姿を現さないはずがない。

少なくとも本当に失敗なのか、失敗したのはなぜなのか、ちゃんと確かめるんじゃないかしら。

だから私を召喚したのは姿を現さない人物Xではなく、普通なら見逃してしまいそうなあなた。まあ、そういうわけね」

「僕は結界を突破してここまで来たんだよ？ 危険だとは思わないの？」

「私があなたを治療したって話を聞いてすぐお礼のために走り出すような奴が？」

それにどうやらあなたは見た目どおりにか弱いみたいだし。大方結界にあなたくらいなら通れそうな穴でもあったんじゃないかしら」

『……君を利用してやろうと思ってるかもしれないよ』

「そうねえ。『おいしいご飯をもらうために利用する』とか、『危ないやつの前では私の陰に隠れる』程度は思ってると考えてるけど、別にそれくらいはいいんじゃない？
生物としてはごく普通の思考よね、それって」

『え、ええと、ええと……っ！』

「はあ……偽悪的に振舞うのはもうよしなさいって。そういうのは心の防衛反応から来るものだろうけど、私が断言してあげるわ。あなたはいい奴よ」

猫は観念したようにうなだれて肩を落とし————実に人間くさい仕草だ————ため息をついた。

「それで、あなたのお名前は？」

『……ないよ。あるいはトム・マールヴォロ・リドルと名乗るべきかもしれないけれど』

（トム・リドル？ それってヴォルデモートの本名よね………どういう関係かしら。でもこの猫はいい奴みたいだし………まあ、様子を見てればいいわよね）

名前を聞いてアヤカの脳裏にヴォルデモートの所業の数々が浮か

び上がるが、この小さな黒猫とヴォルデモートがどうしても繋がらない。あえてつなげるとしたら赤い瞳に黒い体毛というカラーリングだが、これはお互い様である。アヤカは日本人だから当然髪は黒いし、召喚師の家系の人間は皆、魔力が励起すると瞳にちたちらと赤い光がとるのだ。

……そこでアヤカは『ハリー・ポッター』に書かれていたトム・リドルの描写を思い浮かべ、自分が今いるのがリドルと血縁であるリチャード・スリザリンの屋敷であることを思い出す。そんな場所に召喚された自分はスリザリンの縁者であるかもしれない——そこまで考えて、まさか、と想像を振り払う。そもそも生まれた世界が違うのだからそんなはずはない、だろう。しかし自分という実例がいる以上、完全に否定できないのがつらいところだ。

『あのさ、僕のことは誰にも秘密にして欲しいんだ』

「ま、わけありっばいのはなんとなく分かるわ。でもひとつだけ教えて欲しいんだけど……」

『答えられることなら』

「あなたが召喚を行ったのは何のため？」

『うん、そうだね……それは話さなきゃいけないよね』

黒猫は数秒沈黙して考え込んだあと、ゆっくりと話しはじめた。

『僕はちよつと特殊な体質で、魔力さえあれば生きていけるんだ。』

けど、魔力がないと飢え死にする。

こうやってしゃべれる上にそんな体質だとバレたらつかまってひどい目にあいかねない。だから僕はこっそり生きてきた。

けど魔力のたくわえも底をつきかけて……こそこそして魔力を人からちよつとずつ掠め取るような生活もいやになってた。

でも長い間探したけど、僕を庇護下において魔力を分けてくれる人は見つからなかった。そんな人が急に見つかるはずもなく、僕は最終手段をとることにしたんだ」

「それが召喚？」

『……うん。とにかくにも僕に魔力を分けてくれる者って条件で召喚魔法を行ったんだ』

「対価はなけなしの魔力と血液ってわけね。対象がそんな大雑把な召喚魔法を行使するなんて……あきれるくらいにリスクが高いじゃないの」

『僕はこんな体だし、それが限界だったんだよ。あまりにも粗くて拙い術式だって分かってたけど、結構瀬戸際だったんだ』

「それで、体のほうは大丈夫？」

『君が魔法で怪我を治してくれたとき、余剰分の魔力を吸収したんだよ。節約すればひと月は大丈夫さ』

「なるほど、お互い幸運だったってわけね」

『そついうことかな』

とりあえず召喚理由について聞いて、感じたものが嘘ではないことにアヤカはひとつほっとする。

「ああ、そうだ。ここから出る抜け道とか知らない？」

『うーん、僕が結界を越えたときは小さな穴から入ってきたからなあ。僕でもぎりぎりの大きさだったから、人間には無理だよ。』

それに第一結界は張りなおされたんだろ？ また同じように穴があるのかは分からないな』

「ダンブルドアも言ってたし予想はしてたけどね……うん、ここはこうしよう」

『ん？ 何？』

「あなたと使い魔契約のラインを結ぶの。もちろん私はあなたに魔力を分けるし、あなたは人間じゃ行けない場所を探す。

私は最大限あなたを守るから、あなたも助言とかしてくれたら助かるわ。

期限はここから脱出するまで。その後のことはそのとき話しあいましょう」

『乗った！』

嬉しそうにきらきら目を輝かせる黒猫がかわいくて、思わずアヤカの顔に微笑が浮かんでしまうほどだ。

しかし、アヤカの脳裏には次の疑念が浮かび上がっていた。 10

00年強固なまま保たれてきた結界が解かれたのはなぜなのか。そして張りなおされた理由は？

召喚魔法を行ったことによる一時的な不具合ならば深く考えなくともいいだろうが、アヤカが目覚ましてから息を吹き返すようによみがえった屋敷の様子を考えるとその可能性はあまりないだろう。ならば、アヤカが召喚されたことによって屋敷の機能が切り替わったのだとしたら……何のために？

まさか、という思いが強くなってきて、アヤカはその思考を振り払うために別のことを考える。

「そうね、それじゃあマーリッド」

『マーリッド？』

「Tom Marvolo Riddleのミドルネームとファミリーネームの頭三文字をつなげて“Marid”。気に入らないなら別の名前を考えるけど」

『僕の、名前？』

心なし黒猫の目のきらきらが強くなった気がする。

『マーリッド、マーリッド。うん、いい名前だ』

機嫌がよさそうな黒猫——否、マーリッドをしばらく眺めながら、アヤカはまたも思考に陥る。

屋敷の機能が切り替わり、結界による防衛機能のみではなく屋敷自体の機能も復活したのだとしたら、それは内部で生活するために他ならない。

壊れても直る壁や床に家具、ちゃんと食べられるみずみずしい果实。確かめてはいないがおそらく屋敷の施設は正常に使えるはずだ。だが結界は閉ざされたまま滞在者を閉じ込めて離さない。堅牢な扉を開くための鍵をアヤカ自身すでに持っている気がして、不安を抱いてしまう。

これは誰かが仕組んだことじゃないのだろうか。今しがたマーリッドと名づけた特異な猫の侵入も、アヤカの召喚も、ダンブルドアの存在ですらも。

すべてが出来すぎている。ここにいる間の期間はおそらく、アヤカがこの世界を受け入れるための準備期間なのだ。

誰がそんなことを、という疑問に答えがあるとするのなら――
それはもしかすると、リチャード・スリザリンかもしれない。

3 子猫と、問いかけ。（後書き）

Q なんかオリキャラ3人目（1アヤカ 2クロウ・クルーウアツ
ハ 3マーリッド）なんだけど？

A この作品は捏造設定とオリキャラが乱舞しています。あと、この作品は『ハリー・ポッターの二次創作』よりも『ハリー・ポッターの舞台を借りたアヤカの話』という色味が強いです。

Q 感想ないよね（笑）

A o r z

4 待ち人、来たる。

アヤカの母は一般人だった。母方の祖父は料理を学ぶためにヨーロッパで修業し、そこで子供、つまりアヤカの母をもつけた。母は母方の祖父の薫陶を受け、立派に祖父の手腕を継いだ。

母が旅行中に魔物の関わる事件に巻き込まれて父と出会い、それから紆余曲折があつて結婚したのだ。

母は普段也大いにその腕を奮ってくれる。

だが——ここでひとつ問題があつた。

母方の祖父が料理の修業のため訪れたのは、何をとち狂ったのかイギリスだったのである。

もちろん母に継がれた料理はイギリスの、それも伝統料理。形がなくなるまで煮込んだり、ほとんど味のついていない料理をテーブルに運んで、後は勝手に塩コショウで味付けしろというものが多かった。

そんな料理を毎日食べさせられることになった人間の反応は二つだ。諦めるか、反発するか、だ。アヤカは後者だった。

——そういうわけで。

「おお。おいしそうじゃのう」

「ふふん、どうですか、私の料理は！」

アヤカは昼から半日かけて作った自慢の料理に胸を張る。

召喚術を駆使して同時進行で作上げた鶏肉の入ったホワイトシチューに、温野菜のサラダ、白パン、デザートにアップルパイというラインナップである。

もちろん便利なルーなんて物はないので、ブイヨンは一から作りしているし、牛乳も牛から搾ったものだ。鶏だってアヤカが自分でさばいている。

ここで幸運だったのが、地下の農牧地に海洋性のもの以外の、ほぼすべての食材がそろっていたことだ。

穀物、リンゴをはじめとした果樹、野菜、ベリー系の果物、品種改良されて牛豚鶏そのほかにも生るバロメツ——原種はカニ味の羊のような果実が生る妙な木だ——に、サトウキビや胡椒をはじめとした香辛料・調味料もそろっていた。さらには時間凍結で保存されていた加工食品までもだ。

唯一塩だけがなかったが、それは魔法で作れたのでダブルドアに協力してもらった。ちなみに、現在手作りパスタも乾燥中である。もっとも温室に入り口のあった地下には食材しかなかったのだが。

先行きの見えない不安こそあったが、それでも今すぐ死ぬわけではない。

もぐ、とアヤカも食事を口に運ぶ。こうしてご飯もおいしいことだし。

「それでダンブルドア、何か進展はありましたか？」

「なにぶん蔵書が多くてのう。古い魔法に関する資料や、組み立て途中の新しい魔法の理論、魔法薬の配合実験データなんかは見つかるんじやが、この屋敷に関するものはまだ見つけておらんよ。そもそもわしでも読めん本も混ざっておるしな」

「私もラテン語は読めるんですけどね。古英語は勉強してないものですから」

「ふむ、ラテン語の文書も多いことじゃし、その部分は手伝ってもらおうかの」

「分かりました」

翌日、早朝から人型の召喚獣を六体ほど動員して文書の解読と整理を行う。

ダンブルドアがすでに読んだもの、ラテン語のもの、それ以外。ラテン語は自分で読むことにして、それ以外をダンブルドアに渡してひたすら読書タイムだ。

「うーん……勉強にはなるんですけど、なかなか目当ての本が見つ

かりませんね……これはホグワーツで教えている魔法の基礎概念に関するレポートか」

「そう焦ることはないじゃろうて……これは月光草の夜間の発光量に関する研究じゃの」

「そうは言いますが、私はともかくダンプルドアは仕事がありでしょう？ 知人の方も心配なさっていると思いますし、出来るだけ早く戻りませんと困るでしょうに。」

杖を媒体として発動する魔法の汎用性の検証レポート……はあ」

「ほっほ、まあそうなのじゃが、焦っても事態が進むわけでもないからのう。……石造りの建築物における構造力学？ 改装するときにでも作ったのかのう」

「とりあえず地道に読み進めるしかありませんか。二重空間の作成方法……うわ、術式が鬼畜なまでに細かい……こんなだから廃れるのね……」

「……なんというか、体がいくつあったんじやと思うほどの研究所の山じゃのう。魔法薬を媒体とする魔法に関するレポート……新しい理論じゃが、いまは役に立たんのう」

「そうですねー。マジパねえ。」

うひい、形式が違う魔法に別の魔法を組み込むためのエミュレート方法……しかもこんなに分厚いの基礎編その1？ げっ、基礎編だけで全4巻とかどんだけよ……」

「もしかすると、君のように『本当に体がいくつもあった』のかも知れんぞ？ まあ、君の頭はひとつしかないわけじゃが。」

おうふ。人体の骨格と筋肉の構造……こういう本は挿絵を動かさん
ほうがいいのう」

「あはは、まさか……いえ」

再度の『まさか』に、さすがのアヤカも徐々に確信を強める疑念
を忘れることは出来なかった。

書物を読む召喚獣、書物を仕分ける召喚獣、斜め読みしたものを
整理して本棚に戻す召喚獣。それらを横目で眺めてアヤカは口を開
く。

「……コンピュータ用語で『マルチタスク』って言葉があるんです
が」

「ふむ？」

アヤカが語りだした話にダンブルドアはいったん手を止める。
ダンブルドアが口にした『もしかすると』の話を聞いて、アヤカ
は確信せざるを得なかった。

自分は外部の人間であり、この世界に対してしがらみを持ってい
ないと思いたかった。そのほうが気楽だからだ。しかし、ここまで
『まさか』が続くと考えを改めるべきだろう。

「要するに『同時に仕事をする』って言う意味なんです。ビジネス
用語だと連絡を待てて今はこれ以上仕事が進まないときなどにほか
の仕事をするという意味があるんですけど、それとは違って、機械

のように本当に同時に物事を処理する『マルチタスク』を私たち召喚師エヴァはしています。

たとえば私が本を読んでいるとき召喚獣エヴァーク・ミニオンの動きが止まらずちゃんと仕事をしているのはその思考法のおかげなんです。

同時に行っているのは主に『体を動かす思考』なんですけどね。それでも右手で数学の計算を解いて、左手でピアノを弾くくらいは出来ますよ。

そうですね、若輩の私でも情報処理なら物にもよりますが五つ、召喚獣を動かすだけなら十は軽いです。

だからあんな風に、私はいくつも本を読みながら読んでない本を整理して、読み終わった本を戻すなんて事ができるんです。

加えるならば感覚情報やそれぞれの召喚獣のコンディションも把握できないと召喚師なんて出来ません。

だから——もしも、本当にもしもですよ？　もしもリチャード・スリザリンが召喚師エヴァークだったのなら、別々の研究を本当に同時に出来ていたはずですよ」

「しかし、わしらは召喚師エヴァークでは……いや」

答えがダンブルドアの口から出る前に、アヤカは斜め読みしたレポートの目的のページを開いてダンブルドアに示す。

レポートの内容は『ホグワーツで教えている魔法の基礎概念』であり、開かれたページに書かれているのは——

「——
バトリナス
守護霊か」

ホグワーツで教えている魔法の中でもひとときわ異彩を放つ守護霊バトリナス

の魔法。杖を振って正しく呪文を唱えることで発動する魔法の中でも、正しく発動しても魔法そのものがしばらく残り続けるその魔法はアヤカから見ても異様だった。

「そのレポートによると、ホグワーツで教えている魔法は基本的に『杖を振り、呪文を唱える』という儀式によって魔法の術式が完成する儀式魔法リチュアルワークです。

通常の魔法の効果は一瞬。肉体を変化させる呪いなども肉体を変化させた時点で魔法の効果は終了しています。残るのは魔法による結果だけ。

魔法を維持してその効果を維持し続ける魔法も、結局は魔法を途切れさせれば効果は終わってしまいます。

物を投げるときも『物をつかんで腕を振る』というプロセスはたどりますが、物は何かにぶつかったり落ちたりするまで飛び続けますよね？

私の召喚術や守護霊は『物を飛ばし続けるために腕を振り続けなければならぬ魔法』であり、そのために多くの魔力を必要とします。ほかにも難易度が高い魔法はありますが、やはり腕を一度振れば物が飛ぶ魔法ばかりでしょう？」

「物にかけられた魔法が発動することはあるが、そういうものは『一定条件を満たしたときに魔法を起動する』ように別の魔法がかけられた結果のものじゃしのう」

「召喚術も守護霊も、一度発動してしまえば魔法そのものが継続して効果を発揮しながらも、ある程度術者から独立しています。

私のこの……チヨコボ幸せの黄色い鳥、のように」

黄色い鳥を呼び出して、アヤカは話を続ける。

「術式の内部構造がかつかつで魔力的な余裕がない召喚獣も、一度起動してしまえば維持に必要な魔力の供給を止めてしまっても……」

黄色い羽がはらはらと淡い光に分解されて徐々に消え始めるが、
幸せの黄色い鳥はアヤカの思考どおりくると回って見せた。

「このとおり、ちゃんと魔法の効果は継続しています。召喚獣の核が損傷する前にもう一度魔力を注いでしまえば、また元どおりちゃんと動いてくれます」

「ふむ、魔法そのものが自分自身を維持しようとしておるのじゃない」

「はい。このレポートによると、守護霊にも同様の機構が存在するようです。」

『考える魔法』——実際はそう表現するよりももっと単純とありますが、少なくともある程度魔法自身が判断力を有していると言えるでしょう。

このように同一性がある以上、少なくとも守護霊のような魔法をリチャードが使って研究を進めたとしてもおかしくはないでしょう」

再度魔力の供給を始めた幸せの黄色い鳥が小さく羽ばたいてみせる。そしてアヤカは改めて幸せの黄色い鳥を消した。

「さて、ここまで長い話をしてそれだけとは思えんのじゃが、本題は何かね？」

「……私の先祖が召喚術を作ったのが1000年前だと言ったら、どう思います？」

「リチャード・スリザリンが生きた時代と合う……そして君がここへ召喚されたことや、召喚術と守護霊魔法の同一性……」

「機能からまさかとは思ってたんですけど、さすがに偶然がこうも続くとなれば、召喚師とリチャードの間には何かつながりがあると考えてしまいます」

そして、物語で記述されていたヴォルデモートと召喚師の容姿の共通点。

不穏な予想だったためにアヤカは口に出さなかったが、それ以外の情報でもリチャードと召喚師の関連性は8割がた肯定できる。

ふうむ、とダンブルドアがひげをなでて考え事をする。数秒の後に、ダンブルドアはアヤカにこう尋ねた。

「召喚獣は壁越しでも呼び出せるかね？」

「条件付で可能です」

「ならば少々来てもらいたいところがあるんじゃないか、いいかね？」

「分かりました」

ダンブルドアは本を置いてアヤカを導く。たどり着いたのは地下の農園……の手前の、薄暗いホールだった。

「この場所がどうしました？」

「うむ。空間に干渉する魔法というのは難易度も高いが、実のところ自由度も高い。

はつきり言ってしまうえば地下にこれほどの空間を作る必要がないんじゃないよ。むしろスペースを取れる地上のほうが管理がしやすいのう」

「なるほど……」

「たしかこのあたりじゃったかな……うむ、ここじゃ」

ダンブルドアは岩壁をノックしてコンコンと音を立てる。その音は壁の向こうが空洞であることを示していた。

なるほど、この向こうに召喚獣を呼び出してほしいのか。

「この壁はどうも魔法の干渉を受けずにすり抜けてしまうのでな、不思議に思えども壁を調べることも壊すことも出来なかった。

かといって転移で移動しようにも、空間がどれほどの広さか分からんから危険じゃったしな」

「壁の厚さは？」

「おおよそ6インチほど。15センチ前後じゃな」

それだけ分かれば十分である。魔法がすり抜けるのならば壁には魔法の干渉を受けないよう魔法がかかっているのだろう。

これで魔法を遮断する魔法がかかっていたらアヤカでもお手上げた。

いや、むしろそんな魔法がかかっているのなら壁越しに召喚する必要などない。

「――憤怒する老王の雷に撃ちすえられよ。召喚、雷帝^{ラムウ}」

呼び出したのは白く長いひげを蓄え、金属の長い杖を持つ、白いローブの禿頭の老人だった。

厳しい顔つきの雷帝^{ラムウ}ぞろりと服を引きずって壁に自らぶつかる。

そしてすり抜けた。魔法がすり抜けるのなら、召喚獣もすり抜けることが出来る。

壁の向こうにあったのは曲がりくねった細い通路だった。

「どつじゃ？」

「通路があります。進みますね」

途中、魔法がすり抜ける壁を何度も越えながら奥を目指す。やがてたどり着いたのは巨大なホールだった。

部屋の壁や天井、床がすべてぼんやりと白くっており、その中央

の台座に虹色の光を発する球体が置かれていた。それに近づいて雷^ラ帝は振り返るが、白く光る壁が広がるばかり。すり抜けてきた壁がどこにあるのか分からなくなっていた。ために軽い雷を放ってみるが、壁は容赦なく魔法を反射して拡散させる。

おそらくは空間転移にも干渉を行っているだろう。生身でここまでたどり着くには転移するしかないが、戻ることは絶対に出来ない。消極的だがえげつないトラップである。

さりとてただのトラップと言い切るにはこの場所は整備されすぎているし、いくつも壁を作る必要はなかったはずだ。何か仕掛けがあるはず。アヤカは雷帝^{ラムウ}を使って台座の球体に触れた。

その瞬間、壁や天井のすべてに文章が映し出される。平安時代の古文と古いラテン語が併記されていた。これこそ、リチャードが召喚師とつながりのあった証拠だろう。

ラテン語が横向きなので読みにくいが、アヤカは古文も読めるので問題はない。

そして、肝心の内容は――

「……屋敷の管理システムの操作マニュアル！ 結界の操作方法もあります。これできつと外に出られるはずです！」

「おお、やったのう！」

「ええと、まずはユーザーインターフェイスを起動して……起動方法は管理者による音声入力？ ああもう、何でパソコン用語が千年前のマニュアルにあるのよ……管理者とは……とは」

そこまで読んでアヤカはその先を口にするのをためらった。

「どうかしたかね？」

「……いえ、少し読みにくかっただけです。管理者とは、アドミニストレーター前の管理者がユーザー登録情報を抹消した後、この屋敷のシステムをすべて維持できるほどの魔力量を持ち、最初にこの屋敷に触れた者に絶対権限が継承されることによって設定される、そうです」

アヤカは嘘をついた。そこには『リチャード・スリザリンの血を引き、この屋敷のシステムをすべて維持できるほどの魔力量を持ち、最初に屋敷に触れた召喚師に絶対権限が継承されることによって設定される』と書かれていたのだ。

アヤカはスリザリンの名にいいイメージを持っていない。半ば予想していたことだったとはいえ、スリザリンの血筋の代表といえるヴォルデモートと最も激しく対立していたダンブルドアにそれを告げるのはためらわれた。

「なるほど、つまりは君かね」

「そういうことになるでしょうね……音声入力……ここでも出来るのかしら。ええと、それじゃあ……」

こほん、とアヤカはひとつ咳払い。これでインターフェイスが起動しなかったら恥ずかしいだろうな、と思いつつ声を張り上げる。

「管理者権限により、ユーザーインターフェイスを起動します！」

……わっ！？」

アヤカの鼻先30センチほどのところに虹色の光球が出現した。
思わず一歩後ずさる。

『ユーザインターフェイスの起動を確認しました。 コマンド入力をどうぞ』

虹色の光は、中性的な声で自らの起動を報告してアヤカの指示を待っていた。

——千年もの間、アヤカを待っていた。

4 待ち人、来たる。（後書き）

Q アヤカの母方の祖父って何者なん？

A イギリスで伝統料理専門店の店長をしています。朝食・紅茶・洋菓子類しかみんな注文しないwww

Q タイトルの『待ち人』って？

A リチャード、あるいは擬人化表現した上での屋敷にとってのアヤカです。

Q リチャードっていったいどんな分野に手を出してたん？

A 魔法の術式（魔法にとつてのプログラムに相当するもの）の研究はもちろん、生物学、錬金術、料理研究（笑）、航空力学（！）、現代物理学（！？）などさまざまです。ちなみに食い道楽だったので地下があんなことに……キッチンも調理器具がたくさんあります。和・洋・中どれでもイけるぜ！ リチャードパネエ……近作最高のチート人間は彼でしょう。

5 異世界の、風。

「脱出ひゃっほーい！」

アヤカは管理者権限で設定を弄って自分とダンブルドアの結界の出入りを自由にした後、さつくり白鳳ケイツ・ハリーで脱出した。

魔物が騒がしかったが、燃える石の獣で石化の光は防げるので問題なかった。近づいて物理的な攻撃を仕掛けようとした魔物はダンブルドアが撃退してくれたので安全にホグワーツまでたどり着くことが出来たのだ。

ダンブルドアの指示でホグワーツの中庭へ降りると、それを見つけたのだろう教師が二人駆けつけてきた。厳格そうな女性と、陰鬱な雰囲気の男性だ。

「アルバス、無事ですか!？」

「はっはっは、怪我ひとつないわい。ま、彼女のおかげじゃよ」

「まったく……心配させないでください。一日以上連絡が取れなくてひやひやしたんですからね！」

「……ご無事でなによりですな、校長。それで、彼女は？」

「アヤカ・ミヤマです。お初にお目にかかります」

「ミネルバ・マクゴナガルです」

「……セブルス・スネイプだ」

マクゴナガルは厳しい顔つきを少し緩めてアヤカの握手に応じる。スネイプは対照的に、眉根を寄せてしぶしぶ握手した。

うわあ、生スネイプだ、などと愛想笑いの裏でアヤカが考える。

“セブルス・スネイプ”は物語のキャラクターとして魅力があり、アヤカは好きだった。とはいえ目の前の人物は文字で表現された存在ではなく生身の人間である。さすがにその点はアヤカもわきまえていた。

「さて、アルバス。何かあったかきっちり説明していただきますからね」

「ほっほ、そうせかさんでもいいわい。とりあえず校長室で話をしよう。アヤカ、疲れているじやろうが少し付き合ってくれんかね？」

「かまいません」

場所を移してダンブルドアが一通り経緯を説明する。結界を調べた際に魔物に森の奥へ追い込まれたこと、そこにアヤカの召喚獣が助けに現れたこと。アヤカが別の場所から飛ばされてきたこと。結界に閉ざされたりチャード・スリザリンの屋敷から脱出する手段を探したこと。いつの間にかアヤカが屋敷の管理者権限を得ていたこと。

「結界が解除されたのは私が管理者になったためだと思われます。そのときにいったん結界を含めた機能が停止し、改めて起動したのかと」

ダンブルドアは結局アヤカが異世界から来たことを口に出さなかった。日本で生まれ育った特異な魔法族であり、帰る場所がないことを端的に説明する。

アヤカは振舞われた紅茶を口に含み、

「そこでじゃ。わしは彼女を養女にして学校に通わせようと思っておる」

「じっほふ!？」

盛大にむせた。

「校長、本気ですか？ あなたが言った彼女の身元に関する話が彼女の嘘でないとどうして言えます。本当だとしても初対面の人間を身内に取り込むと？ 信じられませんな」

「けほつ、ごほつ、す、スネイプ先生じゃないですが、どうして話がそう一足飛びになるんです？」

「アルバス、帰る場所がないのは確かに大変でしょう。ですが養子縁組を組む必要がどこにありますか？」

「まあまあ、落ち着きなさい。彼女は信用できるとも、セブルス。自分も大変な状況にある中わしをずっと助けてくれたんじゃないからう。養子縁組の必要性じゃが……アヤカ、聞きなさい」

「え、あ、はい」

今までのいたずらっぽい表情が嘘のように真剣な目で三人を見回すダンブルドア。

「リチャード・スリザリンの一生は謎に満ちておる。なぜ空間干渉魔法の新理論を次々と打ち立てられたのか。彼の造った結界が1000年もの間破られなかったのか。

そしてリチャードは2度行方不明になっておる。1度目は2年ほどで帰ってきたようじゃが、その数カ月後に、今度は永遠に姿を消した。そのときから結界は何者をも通さんようになったと歴史は語っておる。まあ、このときに死んだとも言われておるが、このときはちゃんと兄に会って遠い場所に行くことを告げておる。

この間の数ヶ月において“死霊使い”^{ネクロマンサー}の討伐を行ったのじゃ。そのため、リチャードは魔法使いとして二重の意味で偉大な先人なのじゃよ」

「技術的なブレイクスルーを起こした研究者、そして悪の魔法使いを倒した英雄として、ですか？」

「うむ。彼はその研究のほとんどを自宅、つまりあの要塞で行った。その研究成果のすべてがあそこに保存されていると考えてよいじゃろう」

「……なるほど、そういうことですか」

ダンブルドアの話にアヤカは苦笑した。ダンブルドアの意図が読めたのだ。

「何がそういうことなのやら、説明していただけますかな」

「簡単に言えば、ダンブルドア校長は私を保護下に置くことでリチャード・スリザリンの屋敷を管理下に置きたいんですよ。

親として私を支援して、その代わりに屋敷に収められたものに関する不用意な流出を防ぐことが目的なんですよね？」

「確かにその面もあることは否定せんよ。

このとおりアヤカはしっかりしておるわけじゃが、それでも一人では出来ることが限られておる。しかし管理者になった以上あの屋敷を放置することは出来んじゃろう。

当然生活圏は魔法界になるわけじゃが、リチャードの研究を欲する

者は大勢いるじやろうて。そんな中、この地に不慣れな娘を一人で放置するわけにはいかんわい。

それに彼女の扱う魔法は扱いにくいがすこぶる強力じゃ。無闇に広めるようなことも避けたいのじゃよ」

「そういうお考えですか……わかりました。そういうことでしたら納得できます」

「いや、校長。彼女を保護するにしてもそれ以外にも方法があるのでは？」

「いえ、セブルス。彼女の身元を保証すると同時に保護するのにはよい手段でしょう。それともセブルス、あなたが彼女の養父になりますか？」

「む……」

「マクゴナガル先生、さすがにそれはちょっと……スネイプ先生もお若いですし、いきなり自分の半分くらいの年齢の娘が出来るのはいくらなんでも困るのでは？」

アヤカがスネイプをフォローするが、当のスネイプがアヤカを射殺さんばかりの目つきで見してきた。しかしアヤカは『ツンツンしてるなあ』と考えるだけでどこ吹く風である。

「……我輩はお前を信用したわけではないからな」

「お手柔らかにお願いしますね」

——ところ変わってリチャード邸。

「まあそういうわけでダンブルドアにお世話になることになったわ」

『ちょ！？　それだけで僕にはガタブル物なんだけど！？』

「なっちゃったものはしょうがないし、ここを出る手段が確立した時点で契約を続けるかどうか再検討するって約束だったじゃない」

『ま、まあそうなんだけど……』

マーリッドは困ったように足元を見る。軟骨がたっぷり入った取り団子。人間用の味付けをせず、あごの力が弱いマーリッドのためにアヤカがわざわざ作った代物だ。それも半分食べかけである。

『ずるいよ！　君がこんな料理がうまいだなんて聞いてない！』

「いや、そんな事言われても……料理がうまいって非難されたのはじめてね」

『これじゃ元の野良生活になんて戻れるわけないじゃないかー！』

マーリッドは鼻先を取り団子に突っ込んでもぐもぐ食べ始める。
マーリッドにとって食事は嗜好品にしか過ぎないが、喫煙者がタバコをやめがたいように、マーリッドにとって食事というのは相当に離れがたい代物とかしていたようだった。

「それじゃ契約は続けるって事でいいのね？」

『これからもよろしく！でもダンブルドア怖いっわあああん！』

「……別にいいのよ。あなたは普段こっちにいればいいし、休みの間はたいていこっちにいるつもりなもの。寂しいって言うんなら夜に様子を見に来てもいいわ」

『それですつとこの屋敷にこもってろって？ 周りにはあの魔物がいるし、そっちもものすごく怖いんだけど！』

「じゃ、一緒に来る？」

アヤカはニヤニヤ意地悪く笑えば、マーリッドはプルプル震え始める。完全ないじめっ子である。

『……分かったよ！ 行けばいいんだろ、行けば！』

ずっと閉塞的なここにいる事と、危険な橋を渡ってでも自由でいるか……二つを天秤にかけて、マールッドは後者を選択した。

アヤ力はくるくるかき混ぜていた鍋の火を止めて中をじっと覗き込む。見事に鮮やかな緑青色だ。まるで毒である。

『はあ……それでアヤ力、その鍋は何なのさ？ さつきから青臭い匂いがきつくて鼻が曲がりそうなんだけど』

「ん。魔力回復薬液エーテルって言って、魔法薬の一種よ。魔力を回復する効果があるの。匂いはひどいけど味はそれほどじゃないわ」

『よくわかんないけど……僕はちよつと散歩してくるよ』

「いつてらつしゃーい」

一口口に含んで、魔力の回復具合を見る。ちゃんと計算した濃さになっているのにアヤ力は満足した。

屋敷の中にあつた数十本の小瓶に薬を分ける。こちらの世界に持ち込んだ魔力回復薬液エーテルと同じ濃度のそれは戦うときの保険だった。

召喚師は鍛錬によって得た膨大な魔力量を持つが、召喚術の消費量もまた膨大なものだ。中には発動するだけで魔力を満タン状態から根こそぎ持っていかれるものすらあつた。

この薬は冷蔵すれば半年持つが、それより先に何度も作ることになるだろう。何せ今のうちにやっておかなければならないことが多い

すぎる。

ダンブルドアに言われずとも召喚術が対人で使われた場合の危険性を、アヤカはよく自覚していた。そのため召喚術のノウハウを誰にも渡す気はなかった。そう、ダンブルドア相手でも。

ダンブルドアの人柄は信用できるが、周囲はそうと限らない。ヴォルデモートの言いなりになっていたクィレルは当然のことながら、6巻の最後で——おそらくは仕方なくではあるが——ダンブルドアを殺害したスネイプもだ。

そして、目下一番の問題はヴォルデモートだ。今は力を失っているとはいえほうっておけば復活しかねない。

そのため、アヤカは今のうちに在り処の分かっている分霊箱ホークラックスを手に入れたかった。ひとつはゴイントの指輪、もうひとつは偽物だがR・A・Bという人物が残したスリザリンのロケット、のレプリカ。そしてリドルの日記。

指輪は探せばすぐ見つかるだろうが、ロケットは在り処がよく分からない。ロンドン近くの崖にある、入り口が海中に没した洞窟という情報だけではあまりにも探しにくい。

ほかにも問題はいくつもある。ホグワーツ地下の確実に1000年は生きている歳経たバジリスク、ウィーズリー家に潜伏しているスキヤバーズことピーター・ペティグリュー、父親が監禁しているバーテミウス・クラウチjr。デス・イーター潜伏している死喰い人として危険な存在だ。

しかしバジリスクは地下の入り口が開けなければどうしようもないし、ペティグリューとクラウチjr、そしてリドルの日記は下手につけばヤブヘビになりかねない。潜伏している死喰い人デス・イーターなど、アヤカが探して見つけられるならダンブルドアがとづくにやっていることだろう。

そしてそれらの情報をダンブルドアに伝えるとしても信用される

かどうか。おそらくほとんど信じず、それでも一応は調べてくれるだろうが……やはりヤブヘビだろう。

アヤカは6巻までしか読んでいない自分が少し恨めしくなりながらも最後のビンにふたをした。

とにかくヴォルデモートさえどうにかなれば、ダンブルドアの庇護下で安穩と元の世界に戻るための方法を探せるというものだ。そのためにはダンブルドアに死んでもらっては困る。

……とはいえそれは本当に『本』のとおりならと但し書きがつくわけで、これらの危険が本当にあるかはこれから確かめなければならない。

それに、アヤカがこの世界に来たときにそばにいたクロウ・クルーアツハはいつたいたのだろうか。杞憂であればいいが、まさかこの世界にまで来ているなんて事になれば……やはり、もう一度戦わなければならないだろう。

「……ま、それが召喚師の仕事なんだけどね」

人間に危害を加える超常の存在を討つことも、常人が触れては危険な魔法に関連した物品を処分することも、召喚師の仕事だった。それを生業とする以上召喚師は、自分を召喚師だと自認しているアヤカは、やはり戦わなければならないのだった。

5 異世界の、風。(後書き)

Q マーリッドってリドル(ヴォルデモート)っぽくないよね。

A マーリッドはこんなんです。

Q 誤字脱字って気づいてる？

A 私は気づかないことが多いので、報告していただけると大変助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4467s/>

ヨビネの声

2011年10月7日06時04分発行